



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano ©転載許可済  
1982 精道教育促進協会(宮尾)三・三四五二芦屋市船戸町12-6

# 教皇様の敵

## 十字架の犠牲、 あたらしい世界のみなもと

### 真のパンを割く

1 共に分ち合い、互いに与え合い、心を尽くして迎え入れ、同じ理想を目指し、寛大な心で奉仕し、信仰において結び合い、熱心に愛すること——こうしたことのなかに「あたらしい世界」はその徴と明らかかな外郭を示しています。その基盤はイエズス・キリスト、御父の御子、愛ゆえに我々人類の兄弟となりたもうた方、以外にありません。

地上での全生活をとおしてイエズスは、この「あたらしい世界」が神の王国であること、お告げになりました。それは、イエズスの犠牲に対する報償であり、その復活と霊の恵みによって始まりました。今もなお打ち建てられつつあるのです。人間たちの中心に現存されるキリストのまわりに、死者のうちから初めて甦られ、教会の頭となられた方のまわりに。(コロサイ1・18参照)その完成は、キリストがあらゆるものを充滿で充たしたもうたとき(エフェゾ1・23参照)、永遠のもとで「あたらしい天とあたらしい地」(ヨハネ黙

示録21・1)を充たしたもうたときなのです。キリストの霊によって刷新された今日の世界でもまだ、その外郭を示しているにすぎません。(現代世界憲章38、39参照)一言で言えば、キリスト教の信仰にとって、あたらしい人類は十字架から躍り出たのであり、何よりも十字架こそ、「パンを割くこと」の真の意味が認められるのです。これはあなたたちのための私の体である……この杯は私の血における新しい契約である。(コリント前11・24、25)

いかにも真のパン割き、私たちキリスト信者にとって根本的なパン割きは、十字架の犠牲しかありません。他のものは全て、そこから流れ出し、そこへと流れ込んで行くのです。じつに、人類が拒絶の殻にとじこめられたため、不正が勝つ声をおげぬため、憎悪がかき消え、歴史があたらしい未来に開かれるように、キリストは十字架にのぼって、罪と不信仰と不正へのいけにえとなることに同意されたのです。まさにそのとき、天から下りたもうた生ける「パン」は、十字架上に惜し気もなく両手をひろげ、私たちのこの地上で、何より

もまずパンをお割きになったのですが、それは死を打ち破り生命へと導くためでした。あたらしい世界はこの「犠牲」にかかっています。したがって、そのとき、新旧ふたつの世界を分つ壁が引き倒されたのです。死者の甦りが確認され、それとともに、人類が新しくひとつに結ばれるだろうという可能性も、たしかめられたのでした。(エフェゾ2・15参照)このことこそ、従ってあなた方が生きるにあたっての第一の確信、あなた方にその証人となっていただきたい第一の確信なのです。

### 人間の未来を決めるもの

2 以上のことから次のようになる道理でありましょう。すなわち、十字架の犠牲は人間の未来にとって決定的なものであるがゆえに、あたかもその場にいるかのように、その犠牲に参加する——そのための手段を私たちに残したうえて初めて、キリストは犠牲を成就し、御父のもとに帰られたのです。十字架上のキリストの犠牲は、真の「生命のパン」を割くことそのものであって、伝えるべき分ち合うべき第一の価値であります。ですからキリストは、カルワリオの丘にのぼるよりさき、「高間」の聖なる沈黙のなかで、パン割きの祭儀をとりおこなう時間をもうけようと望まれたのです。十二使徒と共に祭儀を挙げ、そしてかれらに命ぜられました。お戻りになって新しい時代を開くその日まで、ご自分の記念として、これを新たに繰り返せ、と。キリスト教最初の過ぎ越しのパンと杯をとってキリストが示された仕事と言葉は、使徒の後継者たる司教とその協力者たる司祭というあなた方の牧者によって、今こども新たにされ続けられています。それはあなた方をキリストの犠牲に与らせ、さらには、全てのものを容れ変えてしまふ復活に、キリストをとおして、与らせてくれるのです。

親愛なる兄弟姉妹たちよ、よくご存知のと

おり、この聖体の祭儀は十字架の犠牲に對し量的な影響を及ぼすものではありません。それに付け加えられたり、その数を増やしたりするわけではない。ミサ聖祭と十字架とは一にして同じ犠牲なのです。(書簡『主の晩さん』9参照)とはいえ、ご聖体の秘跡には大切な働きがあります。それは、そもその最初の十字架の奉獻を、私たちの手に委ねるということです。今の私たちにしても、それが現実に行なわれるということ。パンとぶどう酒の形のもとにキリストの御体と御血を現前させること——それによって同時に、十字架の犠牲が現在の人間の現実となり、私たちにも立ち合うことのできるものとなるのです。その結果、十字架の犠牲はその唯一の独自さによって、救いの歴史の転回点でありつづけ、時の流れと永遠の掬がりとを結びつける本質的なものでありつづけます。ですからご聖体は教会のなかで、各時代にあつて十字架の犠牲を伝えていく「中継局」ともいえるべき秘跡なのです。この秘跡によって十字架の犠牲は、現実にとりおこなわれていくという現実性を獲得するからです。こうしてご聖体はあらゆる時代に、救いと甦りのための力を顕わされるわけです。使徒職が絶えることなく引き継がれるおかげで、ご聖体の祭儀の言葉にキリストの与えたもうた強さと力は、聖霊の働きに結ばれて、再臨のそのときまで、保たれ伝えられます。奉獻する司祭の口をとおしてその言葉を語られるのはキリスト、たった一度の犠牲に私たちを与らせてくださるのも、キリストご自身なのです。

目をみはるようなご聖体の不思議さ。その重要さによってご聖体は、ご受難とご復活ともども、私たちの救済史上の事件です。教会を担う構築物のひとつ、「教会をつくる」ものです。現代はそこを間違えてはなりません。私たちは新世界の憲章のなかに、ご聖体に充分ふさわしい場所を与えねばならないのです。

そのためには言うまでもなく、主のみ言葉の力をそっくり保ちつつけることが、一番大切です。すなわち、教会・教父・公会議・教導職・信者の共通の信仰が一致して受け容れ、理解してきた聖伝のとおり、主のみ言葉を受け容れ、理解することです。それはつまり、十字架につけられ甦りたもうた主が、真に、実際に、実体的に、ご聖体のうちに現存したまい、パンとぶどう酒の形が実存しつづけるかぎり現存したもう、ということに他なりません。ご聖体に対し私たちは最大限の崇敬の念を抱くばかりか、礼拝をささげなければなりません。(書簡『主の晩さん』3・12参照)これが教会の核心、その生命力の秘密です。教会はこの神秘を忠実に見守って、それを完全な形で確認しつづければなりません。

司祭職への尊敬と感謝

3 最後に、親愛なる兄弟姉妹たちよ、聖体大会によって、ミサ聖祭に関し、ご聖体の司祭職と信者すべての役割のことで、あなた方の理解は深められるではありません。

司祭は叙階の秘跡を受け、あなた方の只中でキリストの占める場所、教会の頭の位置に擬せられます。その聖なる司祭職は欠くことのできぬものであって、とりおこなわれるミサがキリストの賜物であって、そこに集まった人びとの力の全く及びえぬ賜物であること示してくれるのです。すなわち、聖体の奉獻を十字架の犠牲と最後の晩餐へ正当に関連づけるために、聖なる司祭職はかけがえのないものであります。(書簡『主の晩さん』9参照)これを更にもますます心にとどめ、尊敬と感謝をもって司祭職を迎え入れてください。教会に司祭が、聖なる司祭が絶えることのないように祈ってください。

しかしあなた方は洗礼によっても、別の理由から、別の意味で「司祭的な民」になっているのです。この資格があればこそ、あなた

方は一人ひとり、自らを豊かな捧げものとするよう召されているのであり、御父はキリストにおいてそれをお納めになるのです。キリストがその犠牲に与えたと同じ意味を、聖体祭儀への参加に与えること——これがあなた方のつとめです。キリストが死なれたのは消え去るためではなく、再び生きるため、み言葉とその振舞いが続いていくため、御父から賜った使命が聖霊のちからで果されるためでありました。キリストの肢体ともなる人びとは、聖霊にしたがって、自由へと召し出されています。すでに信仰と一致への道は開かれており、新しい人間としての規範も公に

あたたかい歓迎、交換、分与、境界を越え、改宗への意志を育て、偏見を棄て、私たちの社会環境をその構造と精神ごとに変化させようという関心——こうしたものにしたがってパンとご聖体に与ることです。お気づきのよう、聖体の食卓を囲む集まりが真のもの、論理的なものであるためには、実際的な結果に至らねばならぬはずでありましょう。というのも、ご聖体においてキリストが御体と御血を秘跡的に現存させるだけでなく、復活の力を伴う十字架上の犠牲をも現存させるとしたら、それは私たちが十二分に——精神的のみならず、秘跡的にも拝領するためだからで

- ミサ聖祭と十字架とは一にして同じ犠牲です。
- ご聖体は教会のなかで、各時代に十字架の犠牲を伝える「中継局」ともいうべき秘跡です。
- 十字架につけられ甦りたもうた主が、真に、実際に、実体的に、ご聖体のうちに現存したまいます。
- パンとぶどう酒が実存するかぎり、主の秘跡的現存は続きます。

なっています。キリストがこの司祭的に期待したもうものは、勇気です。前に進んで行くこととする勇氣、愛の道にしたがって、たしかに殉教者のように再び苦しみ再び死ぬことを引き受けようとする勇氣、しかしやはり殉教者のように犠牲によってこそ事は成就すると信じている——そういう勇氣をキリストは期待しておられるのです。

この神学的な考察には、兄弟的な本性という面への人間の側での展開が含まれています。今度の聖体大会では、教会に生きるようにご聖体で生きるということが、示されて来ました。つまり、パンに求められる全てのこと——

す。キリストという源に遡るため、さらには具体的な生活と歴史のなかで、人間の手に任せられていることを何ひとつなおざりにせず、究極的な目的に向って努力するためだからです。これこそ、あなたたち大会の参加者とルルドの巡礼者それぞれに、わたくしが心をこめて伝えたいメッセージであります。思い出しただきたい、「あたらしい世界」——断固たる決意で取り組んでおられる「あたらしい世界」を構成する三つの要素が何であるかを。そのどれをも現代の教会は無視してはなりません。

ご聖体の神秘のうちのキリストを瞑想すれば、あなた方はその御母マリアの眼差しと出会うでしょう。イエズスがイエズスの体と血を形づくられたのは、聖霊の働きをとおして、聖母においてなのです。「かれは乙女マリアより生れたもうた」。信仰篤い聖母は幸いなるかな。聖母の取り次ぎを経て、イエズスの最初のしるしがカナで顕わされ、弟子たちの信仰を生んだのでした。カルワリオで聖母は御子の至高の恵みとひとつに結ばれます。五旬祭に弟子たちと祈っていたとき、聖母のみでいる前で、聖霊の恵みは豊かに溢れました。今やキリストの栄光に連なって「あたらしい世界」のなか、まさにこのルルドの地で、聖母はベルナデッタの前に姿を現わしたので。人間たち、罪深い人間たちの真近に。改心の必要に迫られ、完全な幸福を求めて渴ききっている人間たちの真近に、現われたのです。心にとどめておきなさい。聖体の十全な信仰と霊の完全な刷新へ、あなた方を導き、教会を導くために、聖母はあなた方のことをお取りなしくださっているのです。

このメッセージを終えるにあたり、聖母と共にわたくしは、主に向かいます。

救い主キリストよ、御身の贖いの犠牲に私たちは感謝を捧げます。それは人間の唯一の希望です。

救い主キリストよ、御身の心に望みを吹き入れたまえ、御身と共に自らを捧げ、兄弟たちの救いのために尽くそうとする望みを。

この祝せられたる秘跡のうちに現におられたもう方よ、ルルドに集う御身の民に豊かな祝福を降り注がせたまえ、この大会が「あたらしい世界」の真の徴とならんために。

(ルルドの聖体大会へのテレビ・メッセージより)

# 説教・講話・書簡等の抄訳

## 我らが人に赦すごとく

### 我らの罪を赦したまえ

ゆるし

1 みなさん、本日はもう一度、あの五月十三日の出来事に触れたいと思います。あの日私が、救い主であらせられる主キリストに申しあげたこと、そして、五月十七日、レジーナ・チェリ(天の元后)を唱えるとき、みなさん方に申しあげたことを思い出さためなのです。

次にのべるのはみなさんに伝えると共に、私自身くりかえしたいことから、その内容は、今もあの時と変わらず、ありのままの私の心と良心をあらわしています。

「親愛なるみなさん、ここ数日の間、とくにレジーナ・チェリを唱えるときに、みなさんは私と心をひとつにしてくださいました。本当に心からみなさん方のお祈りに感謝し、すべての方々に祝福を送ります。私はとくに、共に傷を受けた二人の方々の近くにいます。私を撃った私たちの兄弟のために祈り、心から赦します。司祭にして犠牲であるキリストと心を一つにして、私の苦しみを教会と世界のためにささげます。」

マリアさま、私はくりかえし申しあげます、『私はすべて御身のもの』(Totus tuus ego sumと)。  
2 赦し。キリストは赦しをお教えになりました。主は赦しについて度々いろいろな仕方でお話しになりました。ペトロが隣人には何度ぐらい赦してやるべきかとたずねると、主は七度の七十倍まで(マテオ18・21)とお答えになりました。

七度の七十倍というのは実質的には、「つねに」ということです。事実「七」という数字

は象徴的な意味をもち、一定の数というよりどちらかと言えば無限をあらわしています。祈り方をたずねる弟子にキリストは、「天にまします我らの父よ」と御父に話しかけるようにお勧めになりましたが、この祈りの最後の祈願は、「我らが人に、つまり私たちに對して罪を犯した人を、赦すごとく我らの罪を赦したまえ」となっています。キリストはこの言葉が本当であることを十字架で御父に向かつてお祈りになりました。「父よ、彼らをお赦しください。(ルカ23・34)」

「赦し」とは悪をなされた人の口から出る言葉です。実のところこれは人の心から出るこのことばで、これを使って、私たちは、人との隔たりの壁を越えるべく努めます。理解と触れ合いとさずなな場をうちたてるのです。キリストは福音のことばをつかって、とりわけご自分の模範で、この「内的な場」は隣人のみならず、神に対しても開かれていることをお教えになりました。ゆるしと慈しみの父であらせられる神は、人間の赦しという場のなかに入りこもうとされます。互いに赦しあう人々、「我らが人に赦すごとく、我ら……を赦したまえ」を実行する人々を赦そうと望みなのです。

赦しとは恩寵です。私たちは謙遜と感謝の心で赦しについて考えなければなりません。それは人の心の神祕であってなかなか推しあかることはできません。しかし私は、申しあげたことを詳しく考えてみたいと思います。それは五月十三日に起ったことの一部をなすからです。

#### カインとアベル

3 三ヶ月間の入院中、私はしばしば、みなさんよくご存知の創世の書を思い出しました。「アベルはひつじ飼いとなり、カインは、地をたがやすものとなった。」

目をへてのち、カインは地の作物を主に供えものとしてささげ、アベルもまた、ひつじのういごを、あぶらみとともに、ささげた。さて、主は、アベルとその供えものとかえりみられたが、カインとその供えものとかえりみられなかったので、カインはひじょうにいきどおり、顔をふせた。

「なぜいきどおっているのか? なぜ顔をふせたか? あなたの行ないがよければ、顔を高くあげてもよいのではないか? だが、あなたの行ないが悪ければ、罪は、待伏せする悪魔のように門のまえに立っている。かれは、あなたを占領しようとするが、あなたはかれを支配せねばならない」と主はおおせられた。

カインは、弟アベルに、「野原にいこう!」といい、野原にいるとき、弟アベルにとびかかって殺してしまった。

主がカインに、「あなたの弟アベルはどこにいる?」とおおせられると、「知りません。私は弟の番人でしょうか?」とカインは答えた。主はいろいろわえて、「何をしたのか? あなたの弟の血が地から私に呼びかけるのだ!」(創世の書4・2・10)

#### 初めての殺人罪

4 この人間最初の殺人、兄の弟殺害を物語る古い章句が病院での黙想中いくどとなく頭に浮んできました。

私の生命を狙った男がちょうど裁判にかかり判決を受けている頃、私は人間初の殺人を語るカインとアベルの話に思いを巡らせていたのです。人命に対する罪が新たな仕方であ

たたび我々を脅かし、多くの罪なき人々の命が人間の手で失われている今日、カインとアベルの間の出来事をえがく聖書の章句はとくに生まましく感じられます。「汝、人を殺すなかれ」という掟よりも、はるかに完璧、決定的な力で迫ってきます。「汝、殺すなかれ」とは十戒の命令で、モーゼが神から受けると同時に、道徳の内的法律の形で、人間の行動の基準として、心に刻みつけられたものです。「あなたの弟はどこにいるのか?」このカインに対する神の問いかけの方が、絶対的禁止を命じる「殺すなかれ」よりも、はるかに説得力があるのではないのでしょうか。「私は弟の番人でしょうか?」というカインのあいまいな返事に対して、神は豊かけるようにならずねになります。「何をしたのか?」あなたの弟の血が地から私に呼びかけるのだ。」

#### キリストは赦しをお教えになる

5 キリストは赦しをお教えくださいました。赦しはまた神が人間の心に問いかけをし、答えを要求なさるときにも是非必要なことなのです。

罪なき多くの人々が人間の手で失われている今日とくに、殺人を犯す人々には赦す心で近づき、同時に、神の問いかけ、つまり、人間生命の創造主であり主である神が、殺人を試み、弟の生命を奪った男、生命の創造主であり主である神に属するものを奪い去った男にされた問いかけを投げかける必要があると思われま

す。キリストは赦せとお教えになりました。主は、「七度の七十倍」(マテオ18・22)まで赦せとおおせになりました。改心の意をこめて、心にうけた問いかけに人間が心の底から答えるなら、神ご自身が赦しをお与えになります。最後の審きと判決は神ご自身におまかせすることにして、私たちはたえず繰り返したいものです。「我らが人に赦すごとく我らの罪を赦したまえ。」(一九八一・十・二十一)

# 不変の教え

## 聖母より頼もう

すべての女性の中で祝福された方。信じたあなたは何と幸せな方でしょう。全能のお方があなたにすばらしいことをなさったのです。考えし神の御母。神の母となられることを考えて実現された無原罪の御宿り。御身のすばらしい「なれかし」。救いのすべての業に最も親密に与り、私たちの救い主の十字架に与ったお方よ、あなたの心は主の聖心とともに剣で貫かれました。そして今、御子の光栄の中であわれな罪人である私たちのために取り次いでおられます。母親として教会をお守りください。あなたの子ども一人ひとりをお守りください。あなたの開いた御手から放射されている光の線に象徴されるすべての恩恵を私たちのために神から得てください。そのため条件を私たちが敢えてお願いし、子供のごとき信頼をもって大胆に単純にあなたにはせ寄ることのできるようお助けください。そうすればきっと、神の御子への道を歩むことができるでしょう。

この祝福された地で私は再び、信頼をこめて、また、つねにすぐかたわらにいてくださるあなたに感謝の意を表します。Totus tuus 「すべてあなたのもので。」

私たちの力と自由をあなたの御子がなしとげられた救いのご計画への奉仕のためにお捧げいたします。聖霊によって信仰を根づかせ、全キリスト信者の民をかためてくださるよう、また、交わりによって、分裂の兆しを克服することを、望徳によって失望落胆している人々に新しい活気が回復されることをお願いいたします。(一九八〇・五・三十一 フランス)

## キリストへの忠誠

「人間はこの世において神の似姿としての

み、存在の意味があります。それ以外の面では何の意味もなく、ある人々が定義づけるように、「無益な情熱」にすぎないと言わざるを得なくなりませぬ。

人間は神の似姿として成長し発展しなければなりません。人間性のもつ神的基本盤、つまり神ご自身の似姿であるということを出発点として、神の養子として成長し発展すべきなのです。

人間は神の養子として自分が住んでいる世界の進歩発展を助ける全活動のなかで成長し進歩すべきです。みずからの手をつかい、才能を駆使して、また現代科学の成功や現代技術を活用して、あるいは、しだいに精密化されてきた種々の方法で知った大宇宙や小宇宙についての知識を適応させて、自己を完成して行かなければなりません。

キリストは、最後に、「私は世の終わりで常にならなれたちとともにいる。(マテオ28・20)とおおせになりましたが、このことばは、私たちに与えられた時代全体のためでもあるのです。

キリストのご不在というような問題はあり得ません。人間の歴史から遠ざかられたという問題もありません。人間の運命や心の不安についての神の沈黙というものも存在しないのです。

どこでもいつでも存在する唯一の問題は、キリストとともにいるべき私たちの側の問題です。私たちがキリストに留まっているかどうかという点なのです。主のみことばの全き真理と主の愛の力に私たちが親しい存在であるかどうか、これだけが問題なのです。

話を結ぶためにひとつ質問させていただきます。(…)あなたは(…)洗礼のときにした約束に忠実ですか。(一九八〇・六・一 フランス)

## 若者へ

新しい目でキリストをこらんなさい

(…)あなた方の神とは何ですか。私たちの時代の社会・文化的変化がすべての信者にもたらす困難を考慮し、同時に、信仰を守るために戦うすべての人たちのことも考えて、私はあえて次のことを短い言葉で、強く主張します。「頭をあげなさい。新しい目でイエズス・キリストをこらんなさい。」

私が去年、あがない主キリストについて、全キリスト信者に宛てて書いた手紙のことを知っていますか。前任者、特にパウロ六世の教えをたどって、現代人と近代社会が陥っている、「神を追放し、宗教的感情の表現を押し殺してしまおう」という誘惑とあやまりを避けるように努めてみました。

## 愛するみなさん

人間の心の中と生活の中で神が死んでしまおうという事は、すなわち人間の死です。私はその手紙の中でこう書いてきました。

「それで自分を——自分の生活の直接的かつ部分的な、しばしば皮相な、時には見せかけの規準や尺度によらないで——徹底的に理解したいと思うならば、自分の不安と疑惑、自分の弱さと罪、自分の生命と死とともにキリストに近づかねばなりません。人間は、いわば自分の全存在をあげてキリストの内にはいらねばなりません。自分を再び見出すために、託身とあがないのすべての真理を受け入れ、自分のものとしなければなりません。もし、人間において、このような内的な進歩が実現されるならば、その時、人間は神への礼拝の実を結ぶだけでなく、自分自身に対する深い驚異の実も結ぶでしょう。実際、人間が「こ

のような、また、かほど偉大なあがない主”をもつに値したとすると、また「滅びないで、永遠の生命をもつよう、神が、そのおん独り子”を賜うたとすると、人間は創造主の前にどれほど尊いものでなければならぬでしょうか。(レデンプトル・オミニス)10)

そうです。親愛なる若者の皆さん、イエズス・キリストは人間の救い主です。あなた方全員を、一人ひとり、今日の学生社会における、また将来においてあなた方が果たされる重要な専門職や責任のある仕事においての「救い主」にするために主はあなた方を自由にしたいと望んでおいでになるのです。

### 生活に信仰を

キリスト教信仰は子供や単純な人々にとつてのみ良いものだとひそかに考えたり声高に述べたりすることはおやめなさい。信仰がまだそんなふうに見えるとなれば、それは青年や大人が非常に怠慢で、信仰が自分の人間的成長にあわせて増していくようにと努めなかつたからです。信仰は幼年時代のためのかわいらしい洋服ではありません。信仰は神の賜物、神から来たる光と力の流れであり、この流れは、みなさんが責任を負うようになるに従って、生活のあらゆる面をすみずみまで照らし、動かしていかなければならないものです。宗教的形成という名にふさわしい形成をうけるためにそれぞれが努力する決心をしてください。あなた方の友人や仲間の学生たちにも決心させてあげなさい。司祭や使徒的協力者の勧めを受け入れてください。人間的知識と信仰、あなたの国の(…)文化と近代的考へ、市民としての役割とキリスト信者としての召命を統合し、やりとげるために彼らと協力してください。あなた方の信仰を称讃し、皆で共に祈ってください。そうすれば教会の真の意味をみつけることが出来るでしょう。

(アフリカ 一九八〇)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説しながら  
そのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部六十円送料六十円  
■一年予約七百二十円送料七百二十円 ■二十部以上一括購入なら送料不要

郵便振替 3-72393  
神戸